

『南方郵便機』における一人称語り

——物語情報の観点から——

藤 田 義 孝

1. はじめに

『南方郵便機』(Courrier Sud, 1929)¹⁾は、出版され本になったサン＝テグジュペリ最初の完結作品であり、彼の事実上のデビュー作とってよい。この小説は、固有名のない語り手「私」が親友ベルニスの冒険と恋を物語る形式で、いわゆる一人称物語(等質物語世界的物語)の体裁を取っている²⁾。そのため、物語がリアリズムの枠内にとどまる限り、語り手は物語世界の物理法則に支配され、たとえば主人公ベルニスやヒロインのジュヌヴィエーヴなど他の人物の行動や心理を物語るためには情報を正当化する根拠が必要となる。じっさい作中には、言葉による情報伝達と体験の共有という二つの根拠が提示されている。ところがその一方で、情報制約のある「私」には語れないはずの事柄が、三人称体・人物視点という本来なら一人称体と相容れない語りのモードで詳しく語られ、正当化しようのない明白な情報過剰が生じているのだ。

『南方郵便機』という一つの作品内で、このように一人称物語のコードを遵守しようとする手段と、あからさまなコード違反とが並存しているのはなぜだろうか。稲垣直樹氏は伝記的な観点から、作家の姿勢がルポルタージュ(一人称体)と19世紀的小説(三人称体)の間で揺れ動いた結果、こうしたナレーション上の無理が生じたのだらうと指摘している⁴⁾。我々は、こうした「無理」が

生じた理由について、物語情報の問題、すなわち情報を正当化する二つの手段と情報過剰の問題を検討することにより、物語論の観点から説明を試みたい⁵⁾。さらに、分析を通じて『南方郵便機』における一人称語りの意味を明らかにすることが本論の最終目的である。

2. 物語情報を正当化する二つの手段

2.1 言葉による情報伝達

作中で語り手「私」の情報源となる言語伝達には、書面と口頭の二種類がある。まず書面では、ベルニスが休暇中、フランスからキャップ・ジュビーの「私」あてにかなり長い手紙を書き⁶⁾、幼馴染である人妻ジュヌヴィエーヴへの恋心や不倫の経緯を打ち明けている。また口頭では、キャップ・ジュビーに立ち寄った際、彼女との最後の別れを「私」に告白している。つまり、「私」のベルニスに関する知識は、打ち明け話をするような二人の親密さと信頼関係に支えられているといえる。

まず、手紙による情報伝達を検討してみよう。語り手「私」は第二部I章で、ベルニスが休暇の始まりをどう過ごしたかを物語り、そこでベルニスからの手紙を引用している。帰国してパリ滞在中のベルニスが、キャップ・ジュビーの「私」あてに手紙を書き送っているのだが、実のところ、この手紙はベルニスの休暇についての情報源にはならない。ベルニス自身が手紙の中で、休暇について語る意図をはっきり否定しているからである。

Et Bernis m'écrivit un jour :

... *Je ne te parle pas de mon retour : je me crois le maître des choses quand les émotions me répondent. Mais aucune ne s'est réveillée.* (p. 51)

ベルニスは帰国の印象を「この街は、壁だ」(p. 51)と一言で要約し、休暇

の過ごし方を語る代わりに、「私」と最初に郵便機で飛行した思い出を長々と語っている。そのとき、共通の思い出への明示的な言及が繰り返し現れる（「最初の出発を覚えているかい？」(p. 51), 「覚えているかい？」(p. 52), 「トゥールーズの灰色の雨のあとの春を覚えているかい？」(p. 52))。「私」の方が当の思い出を忘れていない限り、共通体験への言及が情報提供にならないことは明白であるが、手紙の大部分は、このように「私」が既知っていることを確認するために費やされている。手紙が「私」に明かす唯一の新情報は、二人の共通の幼馴染である人妻ジュヌヴィエーヴにベルニスが恋したことである（「僕は泉に再会した。覚えているかい？ ジュヌヴィエーヴだ」(p. 52), 「旅の疲れを癒すのに必要だったのは彼女なんだ」(p. 55))。ベルニス「私」あてに書き送ったはずの他の手紙は引用されず、第二部Ⅵ章に見られる「私」からベルニスあての返信において触れられるに留まる（「君の手紙と、僕らの囚われのお姫様について、僕はよく考えてみた」(p. 66))。「君の手紙」(«tes lettres»)の複数形から、ベルニスは「私」あてに何通も手紙を書き、ジュヌヴィエーヴとの不倫の経緯を報告していることが窺える。そのため、語り手「私」が二人の不倫について物語る情報は、少なくとも部分的には正当化されることになる。「部分的」というわけは、後に情報過剰を検討する際に見るとおり、ベルニスがいかに詳細な手紙を書き送ったとしても、第二部で語られる情報をすべて伝えられるはずがないからである。

いずれにせよ、ベルニスの手紙は、不倫の始まりとその経緯についての情報を「私」に提供する機能を持つことが分かる。物語性という点からは、ベルニスの飛行という第一次の物語に対し、彼の手紙によって「ベルニスとジュヌヴィエーヴの不倫物語」という第二次の物語⁷⁾シークエンスが開かれる。そして、ベルニスの手紙で開かれたシークエンスは、もう一つの情報伝達手段である打ち明け話によって閉じられることになる。

打ち明け話による情報伝達は、第三部Ⅲ章からⅤ章にかけて見られる。キャップ・ジュビーに着いたベルニスは、ジュヌヴィエーヴとの最後の別れを

「私」に打ち明ける。第三部Ⅲ章は「そして、ジャック・ベルニス、僕に体験を物語った」(p. 95)と結ばれ、Ⅳ章では別離の挿話が三人称体・人物視点の物語として語られた上で、Ⅴ章は次のように始まる。「そして、ベルニスは出発前に、体験全体を要約してみた」(p. 99)。つまり、打ち明け話是一种の枠物語となっており、Ⅳ章が別離のエピソード本体(=打ち明け話の内容)に対応するため、大きく見ればⅣ章全体を「内容の間接的パラフレーズ」と捉えることができる⁸⁾。ただし、この「物語化された打ち明け話」という構図は、後に見る情報過剰のせいで、やはり実質的には無理のある形になってしまっている。

このように、語り手「私」の情報源という観点から見ると、手紙と打ち明け話は、ベルニスとジュヌヴィエーヴの不倫物語の文字どおり一部始終を「私」に伝える機能を担っていることが分かる。手紙は不倫の始まりと経過を、打ち明け話は終わりを「私」に伝えているが、じっさい、共に過ごした過去の思い出を除くと、「私」と二人の間にある実質的な交流は手紙と打ち明け話だけなのである。『南方郵便機』の時間は、飛行の時間(第一次の物語)、休暇の時間(二人の不倫物語)、そして思い出の時間という三層構造から成っているが⁹⁾、思い出以外での「私」とベルニスの接点は、休暇中に書かれた手紙と、キャップ・ジュビーでのわずか20分間の邂逅でしかない。ジュヌヴィエーヴとのつながりに至っては、子供時代の思い出の他には、ベルニスの手紙から得られる間接的な情報しか持たないのである。主要登場人物との接触や交流がこれほど少ないことを鑑みると、「私」という人物は単に、二人の不倫物語の開始と終了の立会人として呼び出されているにすぎないように見えてしまう。この仮説は、後に情報過剰の問題を検討するとき、さらに説得力を帯びるだろう。というのも、物語情報の制約違反があまりに明白であるため、ここで検討した伝達手段も、情報の正当化という点ではきわめて部分的な効果しか持たないことが露呈してしまうからである。

2.2 体験の共有

体験の共有は、「私」への情報提供を意味する言語伝達とは異なり、「私」自身が体験して知っていることを、ベルニスとの共通体験として提示することで、¹⁰⁾ 彼についての物語情報を正当化する戦略である。物語情報という点で問題を生じない子供時代の思い出語りを除くと、共通体験への言及が見られるのは第二部I章においてである。語り手は「ここで時間を遡り、過ぎ去った二ヶ月のことを語らなくてはならない」(p. 49)と前置きし、ベルニスの休暇について語り始める。

Deux mois plus tôt il montait vers Paris, mais, après tant d'absence, on ne retrouve plus sa place : on encombre une ville. Il n'était plus que Jacques Bernis habillé d'un veston qui sentait le camphre. Il se mouvait dans un corps engourdi, maladroit, et demandait à ses cantines, trop bien rangées dans un coin de la chambre, [...]

«Allô... C'est toi ?» Il recense les amitiés. On s'exclame, on le félicite :

«Un revenant ! Bravo !

—Eh oui ! Quand te verrai-je ?»

On n'est justement pas libre aujourd'hui. Demain ? Demain on joue au golf, mais qu'il vienne aussi. Il ne veut pas ? Alors après-demain. Dîner. 8 heures précises. (p. 49)

このくだりに含まれる情報は、一人称語りの制約を超えているように見える。というのも、ベルニスの休暇中、「私」はキャップ・ジュビーにいたはずであり、既に見たようにベルニスの手紙もパリでの休暇について情報を提供していないからだ。ところが、語り手は、上記引用箇所を正当化しているのである。なぜなら、問題となるのは二ヶ月前にベルニスが経験した単起的な（一回きりの）出来事の描写ではなく、「私」自身もベルニスと共に何度も経験し

てきた反復的な出来事の描写だからである（「帰国するたび、いつも僕たちはこんな世界を見出すのだった」(p. 50)）。語り手は第二部の冒頭で、これから二ヶ月前のことを物語ると言っているが、実際には、ベルニスが二ヶ月前に体験した固有の出来事ではなく、ベルニスと「私」が帰国するたびに繰り返し体験した出来事を物語っている。つまり、物語は単起法と見せかけつつ括復法にすり換わっているのである。¹¹⁾じっさい、上記引用部には、出来事の反復性を示す指標がいくつも見られる。最初の段落から格言的現在形と一般的な「on」が用いられ（«après tant d'absence, on ne retrouve plus sa place : on encombre une ville»）、他の時制もすべて現在形か半過去になっているため、引用部が括復的描写に対応していることが分かる。電話での会話はいっけん単起的な場面描写に思えるが、やはり括復的叙述である。動詞の現在時制に加えて、総括的な一言（«Il recense les amitiés»）における複数定冠詞の«les»や«On s'exclame, on le félicite»における人称代名詞«on»から、ベルニスが複数の友人に電話をかけていることが窺えるからである。

こうした文法的指標に加え、会話が直接話法から間接話法へ移行していることも括復法の指標として挙げられよう。電話でのベルニスの言葉は、最初だけ直接話法で伝えられ、残りの言葉は暗示的にしか示されない。ベルニスが発したはずの言葉は、友人の応答の中にほめかされるだけである。友人の言葉についても、最初は直接話法だが、残りはすべて間接話法となっている。つまり、電話での発話に関して、ミメーシス性（再現性）が全体的に減少していることが分かる。ところで、ミメーシス性の減少は、まさに括復法の特徴である。ジュネットが指摘するとおり、ある出来事が詳細かつ正確に描写されると、それとまったく同じ出来事が何度も繰り返されるとは思えなくなるため、ミメーシス性の高い叙述は括復法と相容れないからだ。¹²⁾このように、いっけん単起的描写と思える電話での会話場面においてさえ、単起法から括復法への移行に対応したミメーシス性の減少が確認される。

こうして、ベルニスが帰国して見出した「世界」の描写は、「私」との共通

体験に基づく括復的語りによって正当化されることになる。そして、括復法それ自体は、描写対象である「世界」の不変性によって正当化されている。

Ce monde, nous le retrouvions chaque fois, comme les matelots bretons retrouvent leur ville de carte postale et leur fiancée trop fidèle, à leur retour à peine vieillie. Toujours pareille, la gravure d'un livre d'enfance. À reconnaître tout si bien en place, si bien réglé par le destin, nous avons peur de quelque chose d'obscur. (p. 50)

括復的な語りを正当化しているのは、対象の不変性、すなわち、彼らが帰国するたびに見出す「いつも変わりばえしない」世界と、それを前にして彼らの感じる漠然とした恐れである。つまり、バルニスの休暇についての物語情報は、代名詞「我々」«nous»が表す体験の共通性と、半過去や「毎度」«chaque fois»といった表現が示す体験の反復性という二要素の併用によって正当化されているのだ。「私」がバルニスの体験について語りうるためには、まず二人の体験を「我々の体験」として同一視する必要がある。さらに、過去の共通体験をもとにして比較的最近のバルニスの休暇を語るには、休暇体験の反復性・不変性が当然の前提となる。このように語り手「私」は、体験の共通性と反復性に基づく括復的語りによって、目立った物語制約違反なしにバルニスの休暇の始まりを語っているのである。

ただし、括復法においては出来事の個別性や一回性、すなわちバルニスの体験の固有性は捨象されてしまうことになる。だが、二ヶ月前のバルニスの休暇は、本質的には「私」との共通体験ではなく彼固有の体験である（そうでなくてはバルニスを主人公として物語る意味がない）。だとするならば、先ほどとは逆に、今度は括復法から単起法への回帰が見られるはずだ。ところで、単起的要素とはバルニス固有の反復不能な体験、すなわち共通体験によって正当化できない情報であるから、単起法は情報過剰を意味する。そして、第二部I章に

おける単起法への回帰は、まさにベルニスへの内的焦点化という情報過剰によって導かれるのである。

(1) «Et voilà tout pareil...»

Il avait craint de trouver les choses différentes et voici qu'il souffrait de les découvrir si semblables. Il n'attendait plus des rencontres, des amitiés qu'un ennui vague. (2) De loin on imagine. Les tendresses, au départ, on les abandonne derrière soi avec une morsure au cœur, mais aussi avec un étrange sentiment de trésor enfoui sous terre. Ces fuites quelquefois témoignent de tant d'amour avare. Une nuit dans le Sahara peuplé d'étoiles, comme il rêvait à ces tendresses lointaines, chaudes et couvertes par la nuit, par le temps, comme des semences, il eut ce brusque sentiment : s'être écarté un peu pour regarder dormir. Appuyé à l'avion en panne, devant cette courbe du sable, ce fléchissement de l'horizon, il veillait ses amours comme un berger...

(3) «Et voici ce que je retrouve !» (p. 51)

ここで確認できるのは、単起法に属するミメシスの叙述（下線部(1)(3)：ベルニスの思考または内的独白の直接話法）と、括復法に属する格言的コメント（下線部(2)）とを往復する語りである。ベルニスの内的独白と取れる直接話法(1)(3)については情報過剰が明らかだ。他者の思考を直接引用できる手段など存在しないからである。いっぽう、格言的コメント(2)については、語り手が自説を述べているだけなので情報過剰の問題は生じない。つまり、内的独白の引用には正当化の術がなく、格言的コメントには正当化の必要がないのである。また、下線部以外については、共通体験と「私」の知識に基づく物語情報の正当化は辛うじて可能である。(1)と(2)の間は共通の休暇体験の延長とも考えられるし、(2)と(3)の間については、ベルニスがサハラ砂漠での一夜の体験を「私」に物語っ

たか、あるいは彼らがその夜を共に過ごした可能性もある。さらに、ベルニス自身が手紙の中で「それから、君なら分かるだろう (《tu me connais》)、また出発したい、もっと遠くへ、予感はそののに理解できない何かを探しに行きたいという、このはやる気持ち」(p. 52)と語るとおり「私」がベルニスのことをよく分かっているなら、ある程度彼の内面を理解して語ることも不可能とはいえない。いずれもフィクション化された三人称語りのモードであることに変わりはないが¹³⁾、あからさまな情報過剰と断定できるほどではない。

このように、上記引用部においては、一応は正当化可能な括復法をベースとした語りの中に、ベルニスの内的独白という単起的要素が、情報過剰を目立たせないよう少しずつ導入されていることが分かる。ただ、「私」の一人称語り¹³⁾が基本にある以上、単起法の完全導入は露骨な情報過剰になってしまう。そのため単起法への回帰は、ベルニスの手紙の直接引用によって果たされている。上記引用の直後から「そしてある日、ベルニスは僕に手紙を送ってきた」(p. 51)と手紙が引用され、共通体験では決して正当化されえない情報、すなわちベルニスの恋を告げる情報によって単起法への移行が完了するのである。

以上のように、体験の共有による情報の正当化は、ベルニス固有の体験に関わる単起的叙述と、共通体験を語る括復的叙述の間を往復する語りによって実現されている。単起法と見せかけながら括復法にすり替わったり、再び徐々に単起法へ回帰する語りによって、遠く離れたベルニスの休暇体験を語るという課題を、語り手はそれなりに巧みな仕方¹³⁾で果たしているように見える。じっさい、ここで検討した第二部I章に限れば、一人称物語の形式は比較的守られているといえるかもしれない。しかし、第二部の他の章には正当化しようのない情報過剰が見られるため、結局のところ一人称形式の遵守は局地的なものであり、語り手「私」が顕在化する箇所においてしか配慮されていないことが分かるだろう。

3. 情報過剰：一人称物語の制約違反

情報過剰が顕著なのは、三人称体・人物視点のモードで語られるくんだり、すなわち、ベルニス、ジュヌヴィエーヴ、彼女の夫エルランといった人物への焦点化が見られる箇所においてである。大まかには、郵便飛行に関するくだりと、ベルニスとジュヌヴィエーヴの不倫物語に関するくだりの二種類に分けられよ¹⁴⁾う。主にベルニスに焦点化されて語られる郵便飛行の話は、第一部Ⅱ章とⅣ章、第三部Ⅰ章後半とⅥ章に対応し、ベルニス、ジュヌヴィエーヴ、エルランへの¹⁵⁾焦点化を含む不倫物語は、第二部のほぼ全体にあたる。

郵便機を操縦するベルニスに焦点化されたくだりについては、リアリズムの範囲内で情報を正当化しうる手段を想像することができない。物語世界が前提とする当時の技術水準（通信手段はモールス信号）においては、キャップ・ジュビーで彼を待つ「私」が機上のベルニスの体験を正確に知る術はなかったし、実際に20分だけ会えたときも、彼らは飛行についてではなくジュヌヴィエーヴとの別れについて語っており、ベルニスの体験が言葉で伝えられることもなかった。また、この点については、共通体験に基づく情報の正当化も成り立たない。問題となるのが、まさしくベルニス固有の体験だからである。たとえば「ベルニスは物思いに耽る。心は穏やかだ。「もう片付いたんだ。」昨日、彼は晩の急行でパリを発った。奇妙な休暇だった。漠然としたごたごたの思い出が、ぼんやり残っている」(p. 40)といった体験が「私」と共有されているはずがない。このように、機上のベルニスに関する情報過剰はそもそも正当化されえないし、正当化されてもいない。

もう一つの露骨な情報過剰の例は、ベルニスとジュヌヴィエーヴの不倫物語である。不倫についての情報源はベルニスからの手紙であるが、複数書かれたはずの手紙については暗示されるに留まり、読み手はその内容も「私」が得た情報も正確に知ることはできない。ただし、ベルニスあての返信で「私」が「ジュヌヴィエーヴのことは、構わずそっとしておいてやれ」(p. 66)と反対

意見を述べていることから、少なくともベルニスにはジュヌヴィエーヴと駆け落ちする決意を伝えていることは窺える。また、キャップ・ジュビーでの会話において「あの後、彼女に会ったか？」(«L'as-tu revue ?»)という「私」の問いにベルニスは「トゥールーズに戻る途中で、また(«encore»)彼女に会おうと寄り道したんだ……」(p. 95)と答えており、動詞«revoir」と副詞«encore」から、ベルニスは駆け落ちの失敗と別れも手紙で「私」に伝えていたことが分かる。

このように、不倫物語の情報源がベルニスの手紙であるなら、まず情報量という観点から次のように問うことができる。ベルニスは「私」あてに、『南方郵便機』の第二部(プレイアード版で約27ページ)に匹敵するほどの手紙を書き送ったのだろうか、と。量だけの問題なら、必ずしも不可能とはいえない。しかし、情報の質について考えると明らかに情報過剰であり、たとえば第二部では、ジュヌヴィエーヴの夫であるエルランの思考まで語られているのだ。

Il [=Herlin] s'irrite presque d'une crainte si vaine. Il veut lui [=à Geneviève] dire qu'il était fou, cruel, injuste, qu'elle seule est vraie, mais il faut d'abord qu'elle s'approche, qu'elle témoigne de la confiance, qu'elle se livre. Alors il s'humiliera devant elle. Alors elle comprendra... mais voici qu'elle tourne déjà le loquet. (p. 62)

いったい誰がこのような情報を語り手「私」に伝えられるだろうか。情報源がベルニスなら、彼はどうやって不倫相手の夫の思考を知りえたというのか。エルランが自分の思考をジュヌヴィエーヴに語り、彼女がそれをベルニスに伝え、彼が手紙で「私」に知らせたというのはさすがに無理がある。そこで、敢えて一人称物語という枠を崩さないまま、この問題を解決しうる解釈を探ってみよう。たとえば、二人の不倫物語について、物語中で言及されていない別の情報源があると仮定する。第二部冒頭の言葉(「ジュヌヴィエーヴとベルニス

の思い出が蘇って辛い思いをするはずの場所を、僕はもうほとんど悲しみも感じずに歩くことができちゃうんじゃないか？」(p. 49))を見ると、物語内出来事の時点と語りの時点には少なからぬ時間的隔たりがあることが窺える。したがって、その間に、「私」が何らかの情報収集を行うことも不可能ではない。つまりベルニスとジュヌヴィエーヴが亡くなった後、フランスへ帰国して、二人の関係について何らかの調査を行った可能性である。物語中に言及されていないものの、遺族に話を聞いたり、日記や手紙を調べたりといった事後的な調査を想定してみることはできよう。一人称物語の枠内で第二部の情報過剰を説明しようとする、作中には他に何の手がかりもない以上、読み手としては、こうした想像による補完に頼るしかない。

しかし、仮にこの想定が受け入れられたとしても、資料や証言を基に「私」が再構成した二人の不倫物語は、もはや物語世界内の一次的「現実」であるとはいえない。第一次の物語世界に属する「私」は、二人の物語を再構成することによって、人物の内面が見渡せる物語世界を新しく作り上げ、この第二次の物語世界に対して三人称的(異質物語世界的)語り手となってしまふからだ。このように、一人称物語の枠組みを維持しようとする解釈の試みそのものが、かえって不倫物語の異質物語世界性を明るみに出してしまう。

物語情報を正当化する手段の有効性が疑われるのは、こうした露骨な情報過剰のせいばかりではない。ベルニスの打ち明け話という、「私」への情報伝達手段の中にさえ情報過剰が見られるのである。既に見たとおり、ベルニスはジュヌヴィエーヴとの最後の別れをキャップ・ジュビーで「私」に物語っており、第三部Ⅳ章が打ち明け話の内容に対応したエピソードとなる。しかし、この「物語化された打ち明け話」という枠組みには、物語情報という点で二つの問題が生じるのだ。まず単純に、エピソード全体を5分間で語る事が量的に可能かという問いが立てられる。ダカールへ向かう途上のベルニスは、寄港地であるキャップ・ジュビーに「規定の20分間」(p. 92)しか立ち寄りず、「私」がベルニスに「まだ5分ある。僕の目を見ろよ。ジュヌヴィエーヴと何があっ

た？」(p. 94) と言うとおり、打ち明け話をするには5分しかなかったからだ。ところが、別離のエピソード自体はプレイヤー版で約4ページを占めており(pp. 95-99)、5分で話し終えるには厳しい分量と言わざるをえない。さらに重要なのは、第三部IV章に含まれる情報はすべてベルニス由来のものといえるのかという質的な問題である。エピソードがベルニスの打ち明け話に対応するのなら、物語情報は彼の知覚・認識可能な範囲に制限されるはずだ。ところがIV章には、あろうことか、ジュヌヴィエーヴに焦点化した二つの段落が存在する。

«Jacques...» Elle le halait du fond de sa pensée. Elle ne cherchait pas son épaupe mais fouillait dans ses souvenirs. [...]

Et voici que peu à peu il lui semble étranger. Elle ne reconnaît pas cette ride, ce regard. Elle lui serre les doigts pour l'appeler : il ne peut lui être d'aucun secours. Il n'est pas l'ami qu'elle porte en elle. (p. 98)

ベルニスがジュヌヴィエーヴへの内的焦点化を用いてエピソードを語りうることは到底考えられず、一人称物語としては明らかな情報過剰である。ベルニスの打ち明け話という枠組みが情報の正当化に失敗している以上、「私」への情報提供はいわば口実にすぎないことが分かる。では、打ち明け話には、他にどのような意味があるのだろうか。なぜ二人の最後の別離は、「私」への打ち明け話という形で提示されているのだろうか。

最後の別離のエピソードは、不倫物語の締めくくりであるから、ベルニスの休暇が語られる第二部の終わりに置くことができたはずだ。しかし、エピソードは第三部に入ってベルニスがキャップ・ジュビーに立ち寄る時まで伏せておかれ、そこで打ち明け話という形で初めて明らかにされている。したがって、一つには別離のエピソードを物語全体の終盤(第三部)に置くという物語言説上の位置づけに関わる理由、もう一つは、打ち明け話という形式の選択による物語上の効果に関わる理由が考えられる。出来事を時間順に並べると、ベルニ

スは、郵便飛行の前日にフランスでジュヌヴィエーヴと別れ、その2日後にキャップ・ジュビーで「私」と別れている。しかし、別離のエピソードがキャップ・ジュビーでの「私」とベルニスの邂逅時点に置かれることによって、ベルニスはジュヌヴィエーヴとも「私」とも、物語言説上のほぼ同時点で別れることになる。ベルニスはまず、第三部IV章の終わりで彼女と別れ（「これでおしまいだ。もう二度と戻るまい」(p. 99)）、V章の終わりで「私」と別れている（「これから君は、どこに宝を探しに行く？ 真珠に触れても、日の下に持ち帰ることができないインド諸島の海人のような君は？」(p. 99)）。このように、不倫物語の最後のエピソードが第三部へ後回しにされたことで二重の別離が作り出され、ベルニスのキャップ・ジュビー出発が、恋人と親友の両方を後に残していく決定的な旅立ちとなるのである。また、打ち明け話という形式がエピソードを語る枠として採用されたのは、それが物語情報を正当化する方便としては破綻している以上、やはりベルニスとジュヌヴィエーヴの運命に「私」を立ち合わせるためであろう。二人の不倫関係の始まりと経過は手紙という間接的な手段で「私」に伝えられていたが、最後はベルニス本人に会って話を聞くという、多少とも直接的な形で二人の関係の結末に立ち会うことが「私」の重要な役割だったと考えられる。第二部冒頭で明言されているとおり、語り手「私」の役割は二人の運命を証言することだからである。「僕はここで後戻りし、過ぎ去った二ヶ月のことを語らなくてはならない。そうしなければ、いったい何が残るといふんだ？」(p. 49)。つまり、「私」が語り手という役割を引き受け、彼らの恋と運命を物語る動機は、悲劇的結末を迎えた亡き友人についての証言を残すためなのである。

4. おわりに：『南方郵便機』における一人称的語り手の機能

以上のように、『南方郵便機』の一人称語りにおいては、言語伝達と共通体験に基づいて物語情報を正当化しようとする手法が見られた。ベルニスから手

紙と打ち明け話によって「私」にもたらされた情報は、彼とジュヌヴィエーヴの不倫物語の一部始終に関するもので、言葉による情報伝達という手段が「私」を二人の運命の立会人にしていて、また、第二部Ⅰ章において語り手は、共通体験に基づく括復法とベルニス固有の体験を語る単起法を往復することで、一人称語りとベルニスの三人称的物語を繋ぎ合わせ、情報過剰の目立たない語りを実現していた。しかしながら、いっけん一人称物語の制約を守るように見えるこれらの手段は、きわめて不完全なものである。機上のベルニスや不倫相手の夫エルランに関する情報過剰はあまりに明白であり、たとえ強引な解釈をもってしても異質物語世界性を覆い隠すことはできない。さらに、ベルニスの打ち明け話においてさえ情報過剰が見られるに及んでは、情報伝達手段そのものが「私」を二人の物語の立会人とする方便にすぎないことが露呈してしまっている。主な問題は、語り手＝登場人物「私」がキャップ・ジュビーに留まっているため、語りの対象から物理的に遠く隔てられ、間接的にしか出来事を知りえない点にある。これは冗説法（情報過剰）だけでなく転説法の原因にもなっているが、¹⁶⁾こうした物語コード侵犯を冒してまで「私」がキャップ・ジュビーでベルニスを待つという役割を負うのはなぜだろうか。

だが、翻って考えるなら、実は「待つ」ことこそが、郵便機の飛行という物語の主な筋に対して「私」の取りうる唯一の行動だったことに気がつく。物語を構成する三層の時間との関わりを見てみると、登場人物「私」は、思い出の時間に対しては参加者または想起者であり、休暇の時間に対しては文通や打ち明け話の相手であり、郵便飛行の時間に対しては待つ者であることが分かる。いずれにせよ、登場人物「私」は出来事の展開に影響を与える行為者にはなりえない。つまり、登場人物としての「私」を特徴付けるのは、有効な行動の欠如なのである。たとえば、ジュヌヴィエーヴと駆け落ちしようとするベルニスを「私」は手紙で諫めるが（第二部Ⅵ章後半）、忠告は無駄に終わっている。不倫物語に対する「私」の役割は、単にその顛末を第三者として見届けるに留まる。また、郵便飛行の物語に対しては、郵便機のキャップ・ジュビー到着まで

はただ待つしかなく、ベルニスの遭難後には捜索に飛び立つものの、結局、彼を救うことはできなかった（第三部Ⅶ章）。このように「私」の行動は、物事の展開を何ら左右することがない。そして、物語終盤の語りを特徴付けるのは、まさにこのような「私」の無力感と後悔の嘆きである。語り手「私」は、思ひ出話によってベルニスやジュヌヴィエーヴとの友情や親密さを繰り返し強調しているが¹⁷⁾、物語の最後で表明されるのは、この友情が不十分で無力だったという告白なのだ。「僕の友情という蜘蛛の糸では、君をちゃんと繋ぎとめておけなかった。きっと僕は、不実な羊飼いたいめに眠り込んでしまったんだ」（p. 108）。亡くした友人のことを証言するはずだった語り手「私」は、とどのつまり自分自身の無力を証言しているのである。

さらに「私」は、友人の運命に対し、行為者＝登場人物として無力であるのみならず、語り手としても無力である。というのも、ベルニスの郵便飛行もジュヌヴィエーヴとの恋愛も、ほとんどが語り手「私」を介さない三人称物語のモードで提示され、「私」不在のまま出来事が展開するように見えるからだ。物語の序盤で「すべてが自分のいないところで続いていくかのように、ベルニスは何もかも後に捨て去っていく」（p. 40）と述べられているが、むしろ「すべてが自分のいないところで続いていく」のは、三人称的な物語展開に対する語り手「私」の立場なのではないか。一人称的語り手を必要としない郵便飛行の話や不倫物語に対し¹⁸⁾、「私」は語り手の役目を放棄しているかのようで、最後には物語からも姿を消してしまう。物語終盤では主要登場人物が一人ずつ姿を消していくが、まずジュヌヴィエーヴ（第三部Ⅳ章）、ついでベルニス（第三部Ⅶ章）、最後には「私」が物語から退場し、後には郵便物のダカール到着を告げる電文しか残らない（第三部Ⅷ章）。したがって、『南方郵便機』における一人称的語り手「私」の本質的な機能は、運命に逆らえない人間存在の儂さを証言することにあると考えられる。儂く消え去るのは、悲劇的結末を迎えたベルニスとジュヌヴィエーヴだけではない。彼らの運命の証人であろうとする語り手「私」もまた儂い存在であることが、一人称語りの消失によって示されて

いるのである。

ここで最初の問いを思い起こそう。『南方郵便機』において、一人称物語のコード遵守手段とコード違反が並存しているのはなぜだろうか？ コード遵守の手段は、とりわけ言語伝達によって「私」を二人の物語の立会人とすることで、彼らの運命を見届けることしかできない登場人物「私」の無力さを浮き彫りにする効果を持つと考えられる¹⁹⁾。また、コード違反、すなわち情報過剰は、郵便飛行や不倫が本来的に「私」と関わりなく展開する物語であることに由来するため、端的に語り手「私」の限界や無力を表すものである。したがって、コード遵守もコード違反も、語り手＝登場人物「私」の無力を示すという点では同じ役割を担うといえるだろう。

このように、『南方郵便機』における一人称的語り手「私」は、運命の前に消え去る人間存在の儚さを、無力で儚い人間の視点から提示する機能を持つことが分かる。無力な人間の行動から唯一残されるのが救出された郵便物であることから、儚い人間は共同事業によってのみ死という運命に抵抗しようという『夜間飛行』(Vol de nuit, 1931)のテーマにつながることは言うまでもない。だが、我々にとって興味深いのは、むしろ物語形式における連関である。『南方郵便機』における郵便物の救出は、一人称的語り手「私」ではなく、非人間的と見えるほど簡潔な電文によって報告されていた。叙情的・感傷的な語り主体が最後に消去されたことは、基本的に読み手の前へ姿を現すことなく物語世界内に居場所を持たない語り手、すなわち『夜間飛行』の三人称的語り手を既に予告しているといえるのではないか。だとするなら、サン＝テグジュペリの二つの初期作品は、主題だけでなく表現形式においても発展的なつながりを有することが改めて理解されよう。

註

- 1) *Courrier Sud* (1929) の引用は全て Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes*, I, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1994 所収の版による。引用の後、丸カッコ内にページ数を記した。引用文中の下線と番号は論者による。

- 2) 『南方郵便機』の語り手が用いる一人称 «je» の和訳としては「僕」がふさわしいと思えるが、本論中で一人称的語り手を指すときには、慣用にしたがって語り手「私」、登場人物「私」等と記す。
- 3) ジュネットの用語の和訳では「等質物語世界的／異質物語世界的」となるが、煩雑さを避けるため本論では主に「一人称／三人称」とし、文脈に応じて「一人称的」「一人称体」と使い分ける。ジェラルド・ジュネット、花輪光・和泉涼一（訳）、『物語のディスクール』、水声社（書肆風の薔薇）、1985〔原著 1972〕、pp. 286-288。
- 4) 稲垣直樹、『サン＝テグジュペリ』、清水書院、（センチュリー・ブックス）、1992、pp. 75-77。
- 5) ここでいう「物語論」とは、テキスト内在論の立場で物語言説やナレーションを分析する狭義の（ジュネット流）物語論を指す。
- 6) 手紙のうち、作中に引用されている部分だけでプレイアード版 1 ページ分以上にあたる（pp. 51-52, p. 55）。
- 7) シークエンスとは、物語の筋を構成する事象連鎖の単位を指す。我々が扱うのは物語のマクロ構造におけるシークエンスである。ジェラルド・プリンス、遠藤健一（訳）、『物語論辞典』（増補版）、松柏社、1997〔初版 1991；原著 1987〕の項目 «sequence» (p. 175)、およびロラン・バルト、花輪光（訳）、『物語の構造分析』、みすず書房、1979〔原典初出 1966〕、pp. 25-29 を参照。
- 8) 物語における言葉の再現について、ジュネットはマクヘイルの提示した 7 段階の話法を紹介している。1. 内容を特定せず発話行為に言及する「物語的要約」、2. 内容を特定する「不完全な物語的要約」、3. 「内容の間接的パラフレーズ」（制辞を伴う間接話法）、4. 「制辞を伴い部分的にミメシス要素を含む間接話法」、5. 自由間接話法、6. 直接話法、7. 「自由直接話法」。ジェラルド・ジュネット、和泉涼一・神郡悦子（訳）、『物語の詩学—続・物語のディスクール』、水声社（書肆風の薔薇）、1985〔原著 1983〕参照。我々が第三部 IV 章は「内容の間接的パラフレーズ＝制辞を伴った間接話法」であるというとき、「制辞」は純粋に文法的な意味というより、IV 章全体が III 章末の動詞 «raconter» によって導入された一種の間接話法と見なしようという意味である。
- 9) 作品の時間構造については次の拙論を参照。Yoshitaka FUJITA, «Le jeu temporel dans *Courrier Sud* de Saint-Exupéry», *GALLIA*, XXXV, 1996, pp. 78-84.
- 10) 共通体験を引き合いに出せるということは、「私」とベルニス体験のレベルで似通っていることになる。既に見たとおりベルニスは手紙で共通体験に言及しており、語り手もまた、「私」とベルニスを指す「我々」«nous» を用いて思い出を語っている。人称と思い出語りについては次の拙論を参照。藤田義孝、「サン＝テ

グジュベリ『南方郵便機』における語りの技法—人称をめぐって—, 『関西フランス語フランス文学』, 第2号, 1996, pp. 34-43.

- 11) 「括復法」(itératif) は繰り返し起こった出来事を一度だけ物語る手法で, 「単起法」(singulatif) は一度起こった出来事を一度だけ物語る手法。ジェラルール・ジュネット, 『物語のディスクール』, 前掲書, pp. 130-133.
- 12) 同書, pp. 138-139.
- 13) ケーテ・ハンブルガーは「叙事的フィクション」と「『私』物語」をジャンル分けし, それぞれに標準的な語りのモードとして三人称体と一人称体を割り当てた上で, 前者をフィクション, 後者を現実言表のミメシスと位置付けている。Hamburger, K., *Logique des genres littéraires*, Seuil, «Poétique», 1986[原著 1977], p. 72, p. 279, p. 285.
- 14) 本論では取り上げないが, 第二部には, 他にも説教師や(XI章), 踊り子(XIII章)といった人物への内的焦点化による情報過剰が見られる。
- 15) ただし第二部のうち, 一人称体・語り手視点が支配的なモードとなるI章と, 「私」の手紙の直接引用からなるVI章後半は除く。
- 16) 転說法(métalepse)とは語りの水準のメタフィクションの侵犯を指すが, ここでは, とりわけ語り手「私」のステータスの二重性に基づく語りの時間と出来事の時間の混同を意味する。このような転說法は『南方郵便機』第一部II章と第三部III章に見られるが, 詳細な分析は後の機会に譲りたい。転說法については, ジェラルール・ジュネット, 『物語のディスクール』, 前掲書, p. 275 参照。
- 17) 語り手「私」の主要な機能の一つは, 三つの思い出語りによって, ベルニスとジュヌヴィエヴを親密な時間共有者として提示することである。前掲論文「サン＝テグジュベリ『南方郵便機』における語りの技法—人称をめぐって」参照。
- 18) 同論文の p. 36 に掲げた一人称的語り手の存在指標分布図からも明らかである。
- 19) もう一つのコード遵守の手段である共通体験は, 第二部I章においてベルニスと「私」の結びつきを強調するとともに, 一人称語りと三人称的物語をつなぐことで「私」の思い出語りを導入する支えとなる。そして, 第二部の思い出語りは, 子供時代の「私」とベルニスとジュヌヴィエヴの親密な世界を描き出すことで, 最後に失われる愛惜の対象を提示している。つまり, 共通体験は, 最終的な儂さや無力さ自体ではなく, その前提を準備する役割を持つと考えられよう。

(本学任期制助教)
2007年4月受理)